



写真1) 山が海にせり出したような陰しい海岸線(浜益区)

溶岩流が生んだまち

浜益区川下の街から、海沿いの国道を雄冬に向かって北上すると、暑寒別山地の山々が海にせり出した険しい海岸線が続きます(写真1)。それでも長い崖やトンネルの合間には、南から群別、幌、床丹、千代志別と、2〜3kmごとに繰り返して集落が現れます。なぜ、断崖がずつと続くのでもなく、まるで定の間隔で置いたかのように、集落が分布しているのでしょうか？実はこの集落の繰り返しを作ったのは、今からおよそ300万年前の火山の噴火なのです。

これらの集落に共通しているのは、山地の谷間を流れる川があること。その川岸に立つて上流を見ると、左右に、こんもりと丸い尾根が盛り上がっているのが分かります(写真2)。地形図を見てみましょう(図)。まるで、群別岳や浜益岳から、何かが垂れてきたように見えませんか？この尾根の正体は、溶岩流です。

今から300万〜200万年前、暑寒別の山々が何度も噴火しました。そのたびに熱いドロツとした溶岩流が幾筋も流れ出し、冷えて固まったのが、これら集落を区切る尾根です。

しかし、それだけでは人が住みやすい地形はできません。溶岩流は冷え固まると、かまぼこのような、U字を伏せた形になり、溶岩流と溶岩流の間は、狭い谷間になります。

しかし、300万年の歳月は大地に変化をもたらしました。風雨が巨大な溶岩を細かく砕き、植物が根を下ろして土を作り、森となり、雨水が集まって川

が流れるようになったのです。川は真水を集め、運ばれてきた土砂は河口にたまり、溶岩流と溶岩流の間に平らな、人が住めるような土地を作ったのです。

溶岩流は地形を作っただけではありません。岩石と森のミネラルが川から海に注ぎ込み、植物プランクトンを増やし、コンブやスガモを茂らせました。そして、それらが呼び寄せたのが、ニシンです。

川の真水と平地とニシン。火山の噴火という地球の営みは、300万年をかけて人々に生活の場を用意してくれたのです。この火山と人との関わりが着目点の一つとなり、厚田・浜益の火山活動が生んだ地形は、令和元年11月、市民有志によって「石狩遺産」第10号に認定されました。(志賀健司)

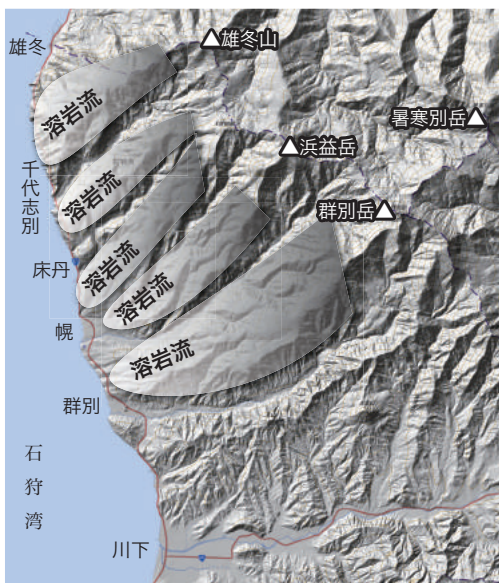


図) 300万〜200万年前、暑寒別山地の山々が何度も噴火、流れ出た溶岩流が海岸に達し、現在の浜益区北部の地形が作られました(国土地理院地図から作図)



写真2) 2つの丸い尾根の間を流れてきた川(千代志別)



石狩市学芸員
志賀健司 Kenji Shiga

専門は地質学・漂着物学・海辺学。地球の環境の変遷などを調べるとともに、石狩の浜辺にどんなものが漂着し、それがどんな意味を持っているかを研究している。

関文化財課 いしかり砂丘の風資料館 ※火曜休館 ☎62・3711

ERIS 「いしかり博物誌」は、えりすいしかりネットテレビ(<http://www.i-eris.tv/>)でもご覧いただけます。